The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	在日コリアンとしての私と臨床哲学
Author(s)	金, 和永
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2026, 8, p. 185-194
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103643
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集３　第17回臨床哲学フォーラム「社会の臨床、そのメチエとエチュード」
シリーズ第２回：社会の臨床と実践の〈メチエ〉

在日コリアンとしての私と臨床哲学

金　　和永

金和永と申します。どうぞよろしくお願いします。ほんまさんのお話とつながるのかどうか、正直わかりませんけれども、ご紹介いただいた感じだと第三世代になるんだとおもいますが、2008年に大阪大学の文学部に入学をしました。２回生からそれぞれ専修に分かれるので、２回生から倫理学専修にはいり、第二世代のひとたちと学部と大学院の間、いっしょにいてたかなぁという気もしてるんですけれども、ちょうど世代の間ぐらいのところにいてた、とおもいます。

「在日コリアンとしての私と臨床哲学」というタイトルで、私が忙しさにかまけてですね、タイトルを早く送ってくださいと言われていたのに、タイトルを考えあぐねている間に期限が来てしまい、ほんまさんがこれどうですかって言っていただいて、これでいいですと言ったのがこれです。在日コリアンと、いちおう当事者として名乗ってきたんですが、そのことと、臨床哲学で勉強したこと、いま働いてやっていることが、どんなふうにつながってたり、つながってなかったりするかをかんがえました。今日の話はほんとにバラバラのものをいろいろ集めただけですので、後からみなさんに解釈をしていただけたらなぁとおもいます。

在日としての自分を語る、ということ

自己紹介として、わかりやすいところから行きます。在日ってこんなひと、というイメージがあるひともいるとおもうんですが、私は二世と三世の間に生まれたんですね。父親が二世で母親が三世なんですけれども、家族全体でいうと90年ぐらいは日本にいてる計算になります。

大阪市にいま住んでいるんですが、大阪生まれの大阪育ちです、といつも自己紹介するんですね。学校に行く機会が多くて、高校生に名前をいって自己紹介をすると、韓国人、最近はなんかカッコいい、というイメージでいいな、みたいな感じなんですけど、別にいいとかもないですし、韓国語しゃべれますか？と言われても、しゃべれません。大阪生まれ大阪育ちだからしかたがないんですけども。でも、韓国籍ではあったんですね。別に韓国籍があるからといってマジメに韓国人してるわけでもないですけど、最近、韓国で大統領選挙があって、もちろんそういうことに一応関心が向くし、在外投票といって私も投票する権利があるんですね。まわりにも、ぜったい投票しようね、というひともいて、私も投票したいなとおもいながら、じつはパスポートが切れていてできなかった…というような感じです。でも、日本国籍に帰化するつもりないなぁ、ということなんですね。そのあたりのモヤモヤみたいなところは、なかなか

説明しがたいものがあるし、ひとによってもぜんぜん違うところなんですけども、そんな感じなんです。

［小学校のときの写真をみせる］で、今は生野区に住んでいます。小学校６年生の時の写真もちょっと載せてます。親しみついでに載せてるだけなんですね。大阪の公立の小学校に通っていましたが、大阪の公立の小学校には民族教育という在日の韓国朝鮮にルーツをもつひとたちが、自分の国の、国というか、地域の文化を学ぶクラスというのがあって、そこに通ってたんですね。こういうのがないと、私と、いわゆる韓国朝鮮の文化とのつながりというのは、すごく気薄なんです。こういうものがあって、自分にも原体験というものが残っている感じになります。

［地図で家族それぞれの朝鮮半島出身地をみせる］在日もいろいろなので、私の場合はこんな感じで、［北や南の］いろんなところから、おじいちゃん、おばあちゃんとか、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんが来ていて、日本で暮らしながら、世帯を持ち、生活をして、私がいるということです。ただ私自身はあんまり韓国には２、３回ぐらいしか行ったことがなくて、親戚がぜんぜんいないんですね。親戚がいてるひともいっぱいるんですけど、私の場合はそれもまた歴史のいろんな理由で、そうなっているわけなんですが、そこの話をどうしようかな、しないでおこうかな、と難しいところなんですけど、自己紹介もあんま長くなってはいけないので、進みますね。［家族写真をみせて］家族はこんな感じでたくさんいます。母と父のそれぞれのきょうだいがたくさんいるという感じですね。みな日本にいてます。［写真］こんな感じですね。この父方のおじいさんは、100歳になって亡くなったんですけども。やっぱり、私が、自分が在日であるって、ひとに自分のことを説明する時に、いつも念頭に置くのは、結局、こういう［日本に］来たひとたちと私の周りのひとたちのことで、あんまり自分のことではないとおもっています。

例えばこのひと［父方の祖父］は、地図でいうとですね、北朝鮮の一番北の方から来たひとなんですけども、当時の中学校を、植民地でしたから、日本の制度の中学校だったとおもうんですけど、そこを卒業して満州に仕事をしに行って、そのあと日本に仕事をするためにやってきたひとなんですね。戦時中は船乗りをしていて、第二次世界大戦中は、民間の船を日本軍が徴用して、軍事物資を南の前線の方に運ぶという仕事をさせていましたので、その民間の船の船乗りとして仕事をして、戦争に巻き込まれて漂流したりとかしたひとなんですね。命からがら帰ってきたというタフなひとで、だから100歳まで生きたかもしれないです。そういう歴史とか。

［写真］私の母方のおばあさんです。このひとは日本に来たときはまだちっちゃかったんですけど、済州島といういちばん南の島と大阪とを家族の仕事で行ったり来たりしながら、幼少期を過ごして、日本の小学校に戦後行くんだけども、家の仕事を手伝いながらだったのであんまり行けず。自分の家族みんなが済州島出身なんだけど、［ほかの］みんな北に帰国するという「帰国事業」というのがあって、自分ひとりが日本に残るということになったひとなんですね。なので、このひとも北の家族に会いに行けませんから、私も行けませんので、私も全然行く機会がない。このふたりとも、天涯孤独になった、という方です。こういうひとたちのことをおもいながら、在日であ

ることを意識するわけですね。

たぶん、自分のやっている活動について責任をもって書く勇気がなかった

在日ということについてはそんな感じです。で、次に私がいま何をやっているかを簡単に紹介したいとおもうんですが、NPOにいま所属してまして、生野区という場所で、「多文化共生のまちづくり」ということと（「IKUNO・多文化ふらっと」）、学習支援の事業を掲げるNPO（「クロスベイス」）に所属をして仕事をしています。2017年からこの仕事をしているんですけども、2017年の当時、私は博士後期課程の大学院生だったんですね。博士後期課程にいながら、でも本当にまったく研究はせずに、というかできずに、さまよってました。2017年に「クロスベイス」という、地域の学習支援のNPOを立ち上げるときに、声をかけていただいたんですけれども、それまでは「とよなか国際交流協会」（以下「国流」）というところで、ボランティアをしたり職員をしたりしていました。

2012年に大学院博士前期課程の１回生になるんですが、それまでに大学の３年生から国流で、外国ルーツのこどもの居場所づくりに関わり、ボランティアをしていました。きっかけも自分で開いたのではなくて、「哲学カフェ」を当時、国流の事業のなかでやっていて、それをほんまさんとその当時の院生の方が運営というかたちで関わっておられたんですね。それに誘っていただいて、私ともうひとり同級生のひとが一緒に国流にお邪魔をして、話をしたというのが、最初でした。哲学カフェからの関わりだったんですけれども、たまたま［職員のひとりに］私の家族ぐるみでお付き合いをしていた、在日の当事者団体の関連の父の友達がいて、そのひとに誘われるかたちで他の活動にも参加するようになったのが、やっぱりきっかけでした。研究との関わりということも、お話しながらいこうかなとおもうんですが、大学の３回生で、まだぜんぜん自分の研究が何かな、というのははっきりしてないときだったんです。

でも、最初から、けっこう、何を考えたいかははっきりしていて、それは自分のアイデンティティとか、あるいは、日本にいるなかで、なんて言うんですかね…、昔のいろんな自分の書いたものを見てみてたんですけど、いろんなかたちでの暴力を受けるという経験について、それを防ぐんじゃなくて、そうなってしまった後、どうするのかみたいなことに結構関心があったようです。遠い記憶ですけども。例えば、差別であるとか、言葉の暴力とか、ヘイトスピーチとか、そういう自分の経験みたいなとこともちょっと絡めて、そういう興味を持っていたみたいなんですね。それで、［ジュディス・］バトラーというひとのヘイトスピーチについての本［*Excitable Speech*（1997）、邦訳『触発する言葉』］があるんですけども、その本をたまたま手に取ることがあって、そのことやってみたいなぁとおもってたのが学部のときでした。

そういう興味関心がありながらも、臨床哲学のみなさんがやってた対話の活動と呼ばれてたものを、すごく面白そうだなとおもってたところもあった。でも、自分ではそれをやってみようという一歩はぜんぜん踏み出せてなかったんですけど、引っ張ってもらって関わり始めた、という感じですよね。そういうきっかけの後、国流で外国ルー

ツのこどもたちの居場所づくり［サンプレイス］にずっと長く関わっていくんですが、それと自分の研究は、自分の中ではあえてというか、はっきりとは結びつけなかったんです。例えば、国流での仕事とか活動とかを論文にしようとか、インタビュー調査してそれを書こうみたいにはどうしてもおもえなかったんですね。

大学院の１回生のとき、「臨床哲学ネットワーキング」という授業が昔あったとおもうんですけどね、いまあるんですか？

［ほんま］とうの昔になくなりました（笑）

その時その社会人の院生の方がたくさん集まって、いくつかワーキンググループを作って話をしながら、自分の経験をシェアする、ということがあったんですけど、そのなかで私は、――これも最近もう一回見直して、やっとおもい出したんですけど――中岡先生がやっていらっしゃた「自己言及班」という謎のグループに所属して、「自己言及」ってこれ、社会問題でもないし、なんでこういうものがあったのか…

［ほんま］臨床哲学の発足当時から、主たるテーマだった「ケア」と「教育」に関心をもてないひとたちが、「第三班」というものをつくったのがきっかけで、その後も、現場に赴かない、そうしたくないというひとたちのためのグループが、名前はいろいろでしたが、あったんですよ。

本当に昔話なんで、みなさんには興味もないことだとおもいますが、申しわけないんですけど、おもい出話としてしゃべりました。でも、自己言及班で自分が書いたものを読むと、そんなこと考えてたなっておもうことがあって。なんだったかというと、その頃、自分がちょうど１年だけ国流で仕事をする、ボランティアじゃなくて、職員になるということがあって、そのときの、「仕事、自分できません」という悩みみたいなのを、そこで話したということが書いてあったんですよね。研究との関わりというか、大学と自分との関わりというのは、そこで自分の経験を語って聞いてもらったという、そういうつながりがあったなとおもいます。それは、結構大事にしていたと、いまでもおもっています。でも、それを例えば論文にすることはぜんぜんなかったんですね。私は、論文、研究の方で修論を書いたのは、結局、ジュディス・バトラーと田中美津というひとの本を読んで書くということやった。同じひとがやってるわけなので、自分のなかでは実践ともちろん通底しているものがあるんですけれども、わざわざ実践を参照したりということはしませんでした。それは私がやらないとおもって決めたという部分もあったけど、どうしてもできなかったというところもあったんだとおもいます。

方法もあんまりわかってなかったし、多分、勇気がなかったんですよ。研究としてこの活動を捉え直してみたい、ということをいっしょに活動しているひとたちに伝えて、その責任を果たすという、その勇気があんまりなかったんだとおもいます。そん

な感じで、活動と大学の生活を続けていました。

じぶんのなかでなにかがクロスした長吉高校

ひとつ、ぜんぜん違う風に並行して走っているだけだったものが、自分のなかでクロスして、あ、頑張ったなっておもうのが、長吉高校という大阪の府立高校でやった活動だったんです。たまたま、国流の活動で知り合った学校の先生からお声をかけてもらって、長吉高校で、新しく総合学習の時間みたいな授業をはじめるので、そこで対話の活動を授業のなかでやってほしい、とオファーしてもらったんですね。長吉高校は、外国ルーツのこどもが多い場所で、外国籍の特別枠というのを作っていて、日本語がまだまだ勉強中のこどもがそこに入ってくるような学校で、ほんとにいろんな子が集まるような場所なんです。その長吉高校がかなり大きな改変、再編を経験することになり、そのなかで新しい授業［「産業社会と人間」という「キャリア教育」にあたる科目］ができる。その授業のなかで、クラス作りも視野に入れた対話［探究のコミュニティ］の活動をしてほしい、とおっしゃっていただいたんです。それは私ひとりでは絶対無理だとおもったので、ほんまさんに相談して、ほんまさんといっしょに先生向けの対話の研修を２回ぐらいやらしてもらったり、その授業が始まる前に、学校のなかで居場所カフェというのをやってる時間があったので、そこで私がボランティアやってみたりとかしながら、準備をして、そこから、結局、足掛け５、６年はその授業を私とほんまさん、高橋さん、たくさんの臨床哲学のメンバーに協力をしてもらって、授業を作りました。授業の作り方も、ほんとに臨床哲学のメンバーと話をして、メールでもいろいろ、ああでもない、こうでもないという意見を言いあったりとか、学校の先生とのフォーカスの違いとか、やり方の違いとかもあって、こちらとしては［心理支援のような］そういう意図で［対話を］やってるんじゃないんだけどな、みたいな葛藤とか、いろんなものを抱えながらその授業をなんとか回していった、ということがありました。結局、2020年までは続けました。最初に声をかけていただいた先生が別の学校に転任になるということも、ひとつのきっかけになって、だんだんと、その授業の運営を学校の先生たちにお渡ししていくことになった。いまはもう関わりはないんですけれども、そういう活動も大学とつながりながらやりました。でも、それも結局、研究にはならずというか、研究にせずというか、それについて書き残したこともやっぱりないですし、残っているのは、当時のメールと、みんなであーだこーだ言って作ったワークシートのプリントとかだけですけど。そういう風に大学生活を送っていたんですね。

在日コリアンだから多文化共生のためのNPOで働くんじゃない

2017年に長吉高校と並行する感じで、クロスベイスという学習支援の仕事もするようになりました。自分のキャリア、大学を卒業してから、自分はどの仕事をするんだろうかということは、ほんとに私、計画ができないひとなので、ぜんぜん考えてこなかっ

たんですね。この後どうするんだろうみたいなことを漠然と不安におもいながら、ただただ、声をかけてもらって、そこに行くということをやってきていて、自分で選んでいたという自分発信のものというのが、あんまりないなともおもいます。流されながらいろんなことをやってきた。クロスベイスも、最初はほんとにもう立ち上げたばかりですから、たくさん仕事があるわけでもないので、週に３回だけ業務委託で、月70,000円でやってたんですね。それだけではもちろんやっていけないわけなんですけれども、それでもなんとかまず３年は続けようかな、という気持ちではじめて、結局、いまで８年ぐらいになりますけれども、何とか続いています。

仕事としては、いま、どんなことをやってるかというと、クロスベイスでやっていた学習支援の事業はほとんど［あたらしく作られた、多文化共生のまちづくりのためのNPO］IKUNO・多文化ふらっとという団体に移行していて、私はそこの職員になってるんですね。［写真］これがIKUNO・多文化ふらっとのある場所で、生野区の廃校となった小学校校舎［元御幸森小学校］を活用してまちづくりをする団体です。ここでいま私は主にこどもに関わる事業の責任者になっているんですが、これは、小学生の居場所づくりの活動で、放課後にここにたくさん小学生が来て、みんな遊んだり、喧嘩したりして帰っていく時間。それから、夕方から夜にかけて１対１とか１対２とかで、勉強を講師のひとたちにお願いをしてみてもらう学校外の学習の場所になります。そこには、いろんなこどもがいてるんですけども、最近は、ほんとに日本語を勉強する小学生とか中学生とか高校生がたくさん増えてきました。生野区はもともと在日のひとがとても多い場所ですけれども、いまはもうベトナムのひととか、中国のひととかがたくさん住む街になっているし、ネパールのひとたちも、いまめっちゃ増えてるんです。親が先に来て、その後にこどもさんが、呼び寄せというかたちで来るというパターンが多いんですね。そのこたちが日本に来て、学校プラスアルファでここで勉強することをサポートをする場所になっています。後は、経理の仕事とかも一応やってるんですけども、あまり得意ではないのに、いつの間にかなり行きで、そうなっちゃったんですけども、ほんとに、経理の仕事を早く辞めたくて… まだこの５月30日までに法人税の申告をしないといけなくて、いま頭の半分はそれに支配されてます。

［フォーラムの］みなさんといろんな話がちゃんとできるかな？というようなことをしていますが、「在日コリアンとして」どうだという話は、私ぜんぜんしてないとおもうんです。それはできないからです。できないですね。外国ルーツのこどもに関わることを、自分が在日コリアンだから始めたわけじゃないわけです。「在日で、こういう仕事をしています」と言うと、「自分のアイデンティティとか、ルーツとかと結構直接的な関わりがあって、その仕事をされているんだろうな」という想定というか期待みたいなものがあるひとがいたり、「在日として、そういうことをやっているのは偉いな」みたいなことを言ってくださるひとがいるんですけど。いま、自分のお話をつらつらしてきた道行からいうと、ぜんぜんそんな風にはなってないですね。もちろん関心はありましたし、自分のアイデンティティのこととかに悩みながら、生きてきたとはおもいますが。そういう単純なつながりではないとおもうんですね。国流にはじめて私が関わったときにいちばんおもったことのひとつは、自分と同じルーツを持つひ

とと、同じじゃないひととがいっしょになにかできるのは嬉しいなぁ、ということだったんですね。例えば、フィリピンのミックスルーツの若者がいて、フランスから帰国してきた日本［国籍］の子だけれど、自分のことを日本人だとはおもってないひととか。そういういろんなひと、日本に住む外国人やそのこどもに関心のある日本のひとたちがいて、そういうひとたちといっしょにこどもの活動をする。その何かをするということで繋がれたのが、自分にとってはすごくあっていたとおもいます。

もしこれが、例えば、在日韓国朝鮮人の集まりに、私が在日朝鮮人だから入って何かをするというところだったとしたら、私は多分すぐ抜けてたとおもうし、そもそも、やっぱり選んでこなかったから、いまこうなってるんだとおもいます。そういう場所に父親に１回、連れてってもらったことがあって、でもあれは中二病だったとおもいますけど、高校生ぐらいで、すげえ斜に構えていて、「あー、みんな、楽しそうにしとんな、民族衣装着て楽しそうにやってるけど、別に」みたいな。いまやったら結構、楽しくできるとおもいますけど、なんかそのときは斜に考えてたんで、「別に同じやからって仲良くなれるわけじゃねえ」みたいなふうにおもってたんですね。半分それは、いまもそうだとおもったんです。そんなひとだったので、やっぱりアイデンティティについて悩みながらも、自分が何者であるという、本質みたいなものを考えたくはない。それを原因とか理由にして何かにつながったりとか集まったりとかというのは、あんまりしたくなかっただろうとおもいます。

例えば、社会問題について考えることは、すごく自分にとってリアルだったんで、そこではじめて想念の世界から抜け出して、在日コリアンとして、自分はどうならなければいけないかとか、こう考えないといけないんじゃないかとか、このことを勉強しないといけないんじゃないかみたいなことを考えながら生きてきた。こういう自分がはじめてそういう場所に行って、自分と同じようなひとだけじゃない、いろんなひとといっしょにやりながら、自分のことも話すし、相手の話も聴くし、そのやり取りしながら、自分についての考え方も変わっていくことを通して、やっと解放されていったりとかした。じつは、それは国流みたいな場所だけではなくて、臨床哲学のなかでたまに話をするとか、いろんなひとに話を聞いてもらうときにも、そういう瞬間があったなぁと、いま振り返ってすごくおもいますね。

やっぱり中学校とか、高校とかのときに、自分のことわかってもらいたいみたいにおもいながらも、ぜんぜんうまく話ができなかったこととか、ネット上のいろんな書き込みに、自分自身が驚いたり、傷ついたりしながら、他のひとがみんなそう考えてんやろうな、みんな朝鮮人のことをそうおもってんのちゃうか、みたいになって、すごくガードを固くしていたりとか、というティーンの時代を過ごしていたので、そこからすると大学という場所を通して、活動をするということを通して、自分がひとに開かれていくみたいなことがあったなと、振り返っておもいます。臨床哲学と私と在日ということとの関わりというのは、やっぱり、どっかに出て行って活動して、そこでいろんな接点があって、それがいまも仕事として続いてるというのは、自分にとってはすごくありがたいことだなとおもいます。

アイデンティティやルーツを尊重する？

アイデンティティとか、ルーツとかを尊重する、というのはすごくみんなよく言うんです。学校でも人権教育のなかで。私も言うことありますけど、でも尊重するというのは、実際、何をすることですか？ということが、あんまりはっきりしない。私の場合は、中高時代の出会い損ねみたいなことがすごく大きかったんです。なんて言うんですかね、ほんとは、「自分は在日だということを大切におもってて…」みたいなことをいろいろ話したかっただけなんですけども、「そんなの関係ないよね、同じ日本語しゃべってるし、同じだよね」みたいな、「ほとんど日本人といっしょだね」みたいな、そういうレスポンスのなかで、だんだん諦めていったんですよね。自分について説明したりすること諦めていったということが、まずあったんですね。

そういうなかで、じゃあ自分は、在日コリアンとしてこういうふうにならないといけない、こういうことを知っておかないといけない、あるいは、在日コリアンだから日本社会をこういうふうに見ることができるんだ、みたいな、なんて言ったらいいんですかね…何かに対抗したい、何かに反発したい、というところでのアイデンティティの作り方をたぶんしてきた。でも、ほんとに私が求めてたのは、ただ、私のことも、あなたのことも、もうちょっと知りたいな、ということだけだったとおもうんです。ほんとに望んでたことから、自分から遠ざかっていく、だんだん自分を固く固くして、理論武装をしていく。例えば、ヘイトスピーチとか、ネット上の ── 当時はＳＮＳないですけども ──「２ちゃんねる」とかで出会ったいろんな言葉とかに、自分なりにいろいろ調べて法律の言葉とかを使って反論する、みたいなことを中学生のときにやってたんです。パソコンオタクだったんで、ずっとやってたんですね。

でもなんか、それもすごくしんどくて、そういうことって、自分にやっぱり入ってくるというか、考えたくないのに、例えば、「朝鮮人は帰るべきだ」みたいな言葉とかが、いつも何かの反論として聞こえてくるんですよね、自分のなかで。こういうふうに言われているのを知っているという形で。そうすると、それは自分のなかの呪いみたいな感じで、自分が発する声、別に言いたくないけど、自分のなかでいつでも聞こえてくる声になっちゃう、ということがあり、それもしんどくなって、反論もやめたんです。そういうことを、ずっとやってきていて、やっとそれからちょっと自由になれたのが、大学に入ってからだったということなんです。

尊重するというのは、私が尊重されたって、そのときにおもえたのは、おもえたというか、いま振り返っておもえるのは、同じひとつ、いやひとつでもないけど、同じ問題とか課題とかに向かっていく、いっしょに何かをするなかで向かっていくということが、まずあって、そのなかで例えば、自分のルーツであるとか、いままで経験してきたことが、活動のなかで自分として出てくる、あるいは、ほかのひとのそういうのが出てくる。そして、それについてちょっと振り返って話すとか。そういう場所がいちばん自分にとっては、自分はいま、在日であるというか、在日として生きているということを、ひとと分かちあっているな、という気がしたんですね。

だから、例えば、学校で「このひとにはこういうルーツがありますから、それを尊

重して、このひとの国の悪口を言わないでおきましょう」とか、――それはもちろん何かの予防としてはすごく大事なんですけども――それは尊重とは、私はおもわない。それは、コンフリクトをさける素ぶりだとおもう。そうではなくて、見ないふりをしないで、いっしょになんかやることが、すごく私にとっては癒しになることだったかな、とおもってます。

［ほんま］ありがとうございます。いまのお話は、じぶんのルーツに関わるアイデンティティだけでなく、ほかのいろんなことにも共通することだな、とおもいながら聞いていました。例えば、私も関わっているんですが、いろんな精神・知的・身体的な条件にあるひとが参加できる表現活動をやっていて、「このひとは、こうこういう障害をもっているひとで、そのひとが自分らしく表現して活躍しています」と、勝手にだれかの主語を設定するという謎の行動があるんですね。でもほんとに大切なのは、和永さんが言われたように、同じことに向かっていって、そのときに、ふと偶然に、そのひとの立ち位置から何かが見えてきて、そういうアイディアがあるんだ、とか、そういうふうに見えてたんか、こんなふうに受け取ってたんだ、というかたちで、そのひとのアイデンティティが立ち現れることがある。異なるルーツをもつ、異なる身体条件を生きる、というのは、はじめは、くじ引きのような偶然ですけど、それがおまえなのか、といわれると、そうでもない。でもひととなにかをいっしょにするときに、ひとの前で、じぶんに割り振られたものをじぶんのものにする瞬間がある。それもまた、偶然ですよね。

そうだとおもいます。そうですね、ちょっとちがう話かもしれないですが、おもい出したので言うと、社会問題に関わることがすごくハードルの高いものに見えがちだとおもうんですね。いま、すごく外国からやってくるこどもが増えているので、現場はほんとに大変なんですね。保育園とか小学校とかどうしたらいいんだろうというなかで、自分には［日本以外には］ぜんぜん何もルーツがないからとか、自分はぜんぜんわからないから、どうしていいかわからないみたいなことで悩まれているひとも結構います。でも一方では、その悩みとは関係なく、とにかく目の前でなんとかやっていかないといけないという現実があって、それに応答してどんどんやっていくひともいます。

私は、社会課題に何とか向き合っていくというのは、とりあえず、何とかいっしょにやっていくしかない、とおもっていて、専門性を持たない、準備をしないと何か活動ができないとか、何か予め知ってないと場を作ってはいけない、とかというふうに一歩引いて、悩んではるひとがいてるんだな、とおもっています。この前も、私たちの活動を発表する機会があったときに、保育園のひとが、そうなふうにおっしゃってたんです。専門的な知識があって、専門職としてプロフェッショナルな対応ができることはすごく大事で、その場にそういうひとがいるというのはめちゃくちゃ安心だし、絶対いいことがあるとおもうんです。けれども、現場に関わるときに、専門家じゃなくてぜんぜんいいし、専門家ではいられないところがある。そういう意味では、私は

別に［朝鮮半島に］ルーツ持ってるからって外国ルーツのこどものことわかってるわけもない。そんなわけないから、いつも「在日コリアンです」というのは、方弁として使ってるところがあるんですよね。学校に行ってこどもに自己紹介するときも、親しみをちょっと持ってもらえたらいいな、みたいな。「ほぼ嘘」みたいな感じで。そういうツールとして若干使ってもいる。でも、こんなかたちで、在日コリアンとして、こんなふうに生きてきました、と自分を表すこともある。小学校のときに楽しんだ伝統楽器がいまでも好きです、みたいなふうに言うときもある。そんな使い方をすごくしてるんですよね。

専門性の話とどうつながってるのかってことなんですけど、そうつながってるんです。ルーツとか、自分に何か原因がある、何かから発するというよりは、何かを目の前に、別にアマチュアでもいいから、とにかく自分としてやっていくしかない、ということをおもい出しました。そうですね。私は専門家であると、そんなふうにおもえたことがないというか、臨床哲学で学んだことを活かそうということをおもったことが、ほんとにないです。活かすとか、ほんとにおもったことないです。ここで一緒にやってることを外でやってみたぐらい。［現場で］コミュニティボール［ハワイの協働の探究でもちいられる毛糸のボール］巻いていっしょにやっているとかも、「学んだから」じゃない。ここで、ほんまさんとかが授業でやってたことを自分もやったからやる、ぐらいの感じです。

専門職はすごくいいんです。専門職は素晴らしい。私には自動車免許しか国に認められた資格はないんで。たしかに、大人に自分を説明して、何かをやりやすくするというのは憧れますけどね。ほんとに無資格なので。やっぱり専門的な勉強されたひとたちの動き方、例えば、社会福祉士の方といっしょに仕事することもありますけれども、やっぱりその専門としての力には憧れるところもあるし、もっと勉強しないとなっていつもおもうんですね。でも、いまの自分の状況のなかで、この「何も資格がない」ということのよさは、何かってきかれると、なんですかね…資格がないからいい、なんでしょうね。例えば、さっきの長吉高校の話とかたぶんそうだとおもうんですけども、普通に考えたら、学校の先生がただの大学院生にそんなことお願いすることってない、とおもうんです。教員免許を持ってなくても、大阪府の仕組みのなかで外部の講師を呼べる枠があるので、それで呼びます、ということだったんです。でも、逆に学校が資格のあるひとを呼ぶことの難しさというか、枠みたいなのが、もしかしたらあるのかもしれないなというのは、ちょっと感じますね。私が「なんちゃら心理士」として呼ばれてたら、そういう期待と枠組みのなかでしか、やっぱり学校に入れないってことになりそうな気がします。

（きむ・ふぁよん）

［ほんま］どうもありがとうございました。では、つぎに菊竹ももえさん、おねがいします。